

公儀と地域権力

久保 健一郎

はじめに

戦国時代の地域権力をめぐる研究は多岐・多彩をきわめている。これは、戦国大名概念への疑義や、地域社会論の展開など多くの問題と密接に関わっているものと考えられ、大名レヴェルの権力論や、国衆論、惣国一揆論、一向一揆論などの成果が次々と出されてきている。ただ、これらは各々の分野における議論は深めたが、必ずしも相互に交わる議論ではなかった。

近年、池享氏はこうした、やや百家争鳴的な研究状況を克服して次の段階への見通しを得るため、様々なレヴェルの地域権力を総括的に捉えることを試みた。⁽³⁾それに際し、池氏がキーワードとして用いたのが「公儀権力」という概念であった。⁽⁴⁾詳しくは後述するが、池氏は「主人が「公儀」に関する権限を基本的に掌握する段階に到達した家権力」を「公儀権力」と概念規定する。⁽⁵⁾すなわち、「公儀権力」とは地域権力のうちでも、家権力を構成する領主権力の問題

であり、池氏は領主権力を軸として、その「公儀権力」化に注目することによって、戦国時代の地域権力を総括しようと試みたのである。

筆者はかつて戦国大名公儀の検討を行なったが、地域権力との関わりではほとんど未考のままにおわってしまった。⁽⁷⁾いまだ地域権力論そのものの検討はわずかなものにとどまっているが、戦国時代研究の動向からいっても、筆者自身の公儀論の進展からいっても、深めていく必要がある問題であることはたしかである。

そこで本稿では池氏の所論に学びながら、公儀と地域権力について、若干の検討を行いたい。ただし、現段階で筆者のなしえるのは、池氏のいうところの広域的「公儀権力」(後述)である戦国大名の公儀と「公儀権力」である領主権力とのかわりであることをあらかじめお断りしておく。手順としては、まず池氏が「公儀権力」概念に至った過程および同概念の有効性を検証し、ついで筆者なりの公儀と地域権力との関わりの検討、さらに若干の展望として移行期公儀論における公儀と地域権力の問題に言及したい。

一 「公儀権力」論の検討

池氏の提唱した「公儀権力」は、概念ではあるが、もともとは史料用語の「公儀」から出発している。すなわち、池氏は「公儀」が「戦国期の地域権力の歴史的性情を考える上で、重要な鍵の一つ」と認識し、「戦国期の地域権力が使用した「公儀」の語義の検討を通じて、その歴史的位置を探っていくことを課題」とした検討から、「公儀権力」概念に至ったのである。⁽⁹⁾

そこで、まず池氏の検討した「公儀」の事例を見えることにする。

【史料1】

一、元就儀を不相伺、号隠居、陣立供使以下一円不仕候事、剩給地をハ子孫にハ譲渡候へて、悉皆申付、公儀計を称隠居、奉公不仕候事、⁽¹⁰⁾

【史料2】

一、於傍輩之間、当座々々何たる雖子細候、於公儀者、参相、談合等、其外御客来以下之時、可調申之事、⁽¹¹⁾

【史料3】

一、申出す儀、はねあわす、身に引懸、可執操之事、

付、不惜一命、人のにくみを受て、公儀ために可然様、裁

判可仕之事、⁽¹²⁾

【史料4】

一、与力一所之者、可随公儀事、

付、与力一所之者給地明所之儀、寄親手裁判、可為曲事之事、⁽¹³⁾

すべて、毛利氏の事例である。これは、「戦国期の地域権力における「公儀」の性格について、議論が集中しているのは、……毛利氏の場合である」という池氏の理解によるもので、実際、朝尾直弘・石母田正・深谷克己・藤井讓治氏をはじめ、多くの研究者が毛利氏の「公儀」について言及し、議論を展開している。⁽¹⁴⁾【史料1】～【史料4】は、いずれもきわめて長文の史料の一部であり、【史料3】【史料4】は同一史料の一部だが、便宜上独立させた。

一方、筆者はかつて戦国大名公儀の検討をもっぱら北条氏において行つたためとはいえ、「議論が集中している」毛利氏の「公儀」について言及すらしなかったのは問題であった。そこで、筆者なりの見方も提示したいが、背景や概要については池氏の詳細な検討に、現在のところ異議はない。

池氏は、井上一族の肅清後、毛利氏が家臣に対して主導権を強化していくなかで、「公的な事柄」であった「公儀」が、人格化する主人である毛利氏の人格として体现されると論じている。天文十九年（一五五〇）の【史料1】【史料2】における「公儀」を「公的な事柄」、元龜三年（一五七二）の【史料3】【史料4】における

「公儀」を輝元の人格とする解釈から導かれているところである。

そのため、【史料2】で先行研究が公の「場」や機関とする解釈を斥けることになっている。⁽¹⁶⁾【史料1】についても、朝尾直弘氏の「実は給地を支配しておりながら、公儀に対してのみ奉公しない」との解釈に異議を唱え、「元就が命令する公的な事柄を悉く奉公しない」との解釈を提示している。⁽¹⁷⁾「公儀」が奉公の対象としての人格や機関であっては、「公的な事柄」↓「人格」とのシェーマに齟齬するからであろう。また、【史料3】【史料4】の「公儀」についても、朝尾氏の解釈を「上意」と区別された機関と見ていると推定してこれを斥け、明確に人格を示すに至ったと述べている。⁽¹⁸⁾

そこで、【史料2】についてであるが、この「公儀」は、たしかに池氏の述べるように「公的な事柄」と解釈することは可能であるが、だからといって公の「場」や機関とする解釈を排除することもできないと考える。池氏も積極的にこれらの解釈を排除するというよりは、毛利氏の主導権が強化され「公儀」の人格化が一步進んでいるとする点や、家臣の主体性が過度に強調されることを問題視する点に重心が移っているかに見える。⁽¹⁹⁾

また、【史料1】についても、「申付」が同史料の他の部分では元就の命令の意として使用されていること、「悉皆」を誅殺された井上元兼の給地すべてと解釈すると何故わざわざ給地すべてと断らなければならぬか不明であること、「計」を「のみ」と解釈するのは、公儀奉公に對置するものは何か不明となる（池氏は「計」を

「ばかり」ではなく「はからい」と読む）ことを指摘して自らの解釈の妥当性を主張するが、⁽²⁰⁾「悉皆」は強調の修飾語と見ても問題なく、「計」を「のみ」としても、強調の「悉皆」に對應する修飾的語句と見る余地は十分にあるであろう。「申付」の事例のみでは決め手に欠けるのではないだろうか。池氏の「悉皆申し付ける公儀のはからいを」という読み、語順における違和感も——これとても決め手にはならないが——拭い去れない。ここは朝尾氏・池氏の解釈はいずれも成り立ちうるところで、さらには「公的な役」のような解釈もありえるところであろう。

このように、【史料1】【史料2】の「公儀」については、必ずしも池氏の解釈する「公的な事柄」に限定できないと考える。では、【史料3】【史料4】についてはどうか。【史料3】は「公儀のために」とあるところから、「公的な事柄」や「公の場」等ではなく具体的対象を指す点は、池氏の述べるのとおりであろう。⁽²¹⁾池氏は「機関の意味が完全に排除できるわけではないにせよ」とするが、⁽²²⁾一命を惜しまず、人の憎しみを受けても、奉仕するようにと要求している対象が機関としての「公儀」では、自身への忠節をこそ望むはずの輝元がそこまで機関への奉仕を強調するのか、いささか不自然であるとも思われ、この「公儀」は当主の人格と見てよいと考える。

【史料4】は池氏が主従関係に関する規定と推定し、与力や一所衆が機関としての「公儀」に随うのは不自然として輝元であると⁽²³⁾する。それでもよいかと思われるが、「公儀」即輝元とするのではな

く、輝元の決定、あるいは機関の決定と解釈する余地があると思われる。すなわち、主従関係それ自体をあらためて規定するよりは、何らかの問題が生じたときにはどこその決定に随うように、と解釈する方が自然のように思われるのである。もしそうだとすれば、輝元の決定ならばともかく、機関の決定ということになると池氏の解釈とは大きく異なることになるが、同じ文書に収められている【史料3】の「公儀」が、当主の人格でよいとすれば、【史料4】も機関の決定とまではいえず輝元の決定ぐらいまでの振れ幅で考えてよいかもしれない。

以上、池氏の検討した「公儀」の事例について、筆者なりに考え直してみた。その結果、「公的な事柄」↓人格という池氏が想定するシェーマは成り立ちうるけれども、それに限定されるものではない、との認識を得た。では、このことは「公儀権力」論とどのように関わるのであろうか。

「はじめに」で見たように、池氏のいう「公儀権力」は、「主人が「公儀」に関する権限を基本的に掌握する段階に到達した家権力」であるが、この「公儀」が「公的な事柄」であり、これを掌握することにより、「公儀」そのものが主人の人格と一体化し「公儀」の人格化を遂げるということであろう。であるから、当然ではあるが、「公儀」の事例における「公的な事柄」↓人格とのシェーマは、「公儀権力」概念にとって重要である。ただ、池氏の議論に則しても、これは画然と進行すべき変化ではないであろう。「公的な事柄」な

り「公の場」なりのある程度多様な広がりをもつ「公儀」のなかに、当主の人格が確たる位置を占めていく（「オーバーラップしていく」ことが認められれば、さしあたり十分なのではないだろうか。「主人が「公儀」に関する権限を基本的に掌握する段階に到達した家権力」が、戦国時代において地域権力として重きをなしていくことは留意すべき特徴であると認めてよいと思われる。それだけに、これを「公的な事柄」↓人格とのシェーマで割り切ろうとしすぎるのは、かえって事実の豊かさ・複雑さを見失うことにならないかとの危惧を抱く。このシェーマの厳密な成立が「公儀権力」概念を左右するのであれば、「公儀権力」概念には、その前提において問題が孕まれていることになるう。

では、厳密に成立しなくてもよい、ということになれば問題はないのであろうか。そこで、次には、「公儀権力」概念によって主張される「公儀権力」論における問題点を見ていきたい。まず、池氏は「公儀権力」にとって「公儀」を自称したか否かは問題とされない⁽²⁴⁾とする。古くに永原慶二氏が、戦国大名がみずから「公儀」と称したことを重視して取り上げ⁽²⁵⁾、それに触発されて戦国大名公儀と関わり続けてきた筆者としては、にわかに受け入れがたいところである。

筆者は、かつて小著のごく初めの部分で、次のように述べた。

しだいに行為としての「公」を執行する存在が、まさにそのこ

とによって存在としての「公」、また公権力となる。そしてそれが正しいには「公」であることを自ら称し、標榜して自らの行為を正当化するようになる。これこそが戦国大名公儀である。したがって、戦国大名公儀は公権力として大きな転換を経て成立している。それゆえに戦国大名が「公儀」と称することそれ自体が重要といえる。⁽²⁶⁾

未熟な考察ではあるが、今でも基本的に同様の理解をしている。こうした立場からは、「公儀」を自称したか否かは「たいへん重要であり、それは権力による正当化の問題と関わっている。『公儀』を『公的な事柄』の意に押し込め、『公儀』の自称を問題にしないゆえ、『公儀権力』論では、正当化の問題もほとんど語られないのである。

ただ、念のためつけ加えれば自称するのは「公儀」のみに限らない。「公」であることを自ら称し、標榜して自らの行為を正当化する」機能を果たしているものであれば、別の文言でもかまわない。筆者が検討した北条氏では、「大途」「公方」が「公儀」に加えてこれに該当したわけである。この点、池氏は、毛利氏では「特に『公儀』が言葉として頻出するわけではない」とするが、同様の機能を果たす文言がないのか知りたいところである。⁽²⁷⁾

次に、池氏が「家臣が自立的在地支配を展開していた毛利氏は、後北条氏のように、民政において『公儀』の立場を主張することも

なかった」とする点である。⁽²⁸⁾ 北条氏の家臣は「自立的在地支配」を展開していなかったのか、「自立的」の内容が問題となるところである。もちろん史料の残存状況に規定されるところはあるだろうが、「公儀権力」論は毛利氏に限られる議論ではないのだから、このように淡白に断ぜられるのは問題である。なぜならば、公儀に関する議論は小菅でも若十の整理をしたように、朝尾直弘・佐々木潤之介・深谷克己・藤木久志・勝俣鎮夫氏らによって、公儀と百姓との対置、関わりを重要な論点として展開したからである。⁽²⁹⁾

いまし子細に考えてみると、公儀論は領主層の結集の問題と、それを必然たらしめる、あるいは結集の過程で向き合わざるをえなくなる百姓層・百姓身分との関わりの問題を大きな柱としてきたといえる。それゆえ、後進の筆者などは、公儀の対象が百姓のみでないことをあえて意識しようとして、「全領民にとっての公儀」との姿勢を打ち出したわけである。⁽³⁰⁾ だからこそ、あらゆる階層と向かい合う公儀にとって、自己の行為、あるいは自己の存在そのものの正当化が重要な問題になるのである。

一方、「公儀権力」論は、すぐれて領主層の結集の問題であるかに見える。もちろん、その背後にさまざまな人びとの動向があることは垣間見られるのだが、あくまで「公儀権力」論としては「背後」である。百姓などの人びとについては、家臣の「自立的在地支配」の問題になってしまうのであるから、これは当然であろう。

以上のところからすれば、「公儀権力」論は、従来の公儀論とは

別物として捉えた方が、あるいは池氏の意図にも叶っているのかも
しれない。ただ、あくまで出発点が史料用語としての「公儀」であ
り、研究史的前提も従来の公儀論であるからには、別物と割り切る
わけにもいかない。この点、混乱や誤解を招かないためにも、何ら
かの言及・整理が必要なところではないだろうか。

二 「御国」「国家」世界と公儀世界

池氏は、戦国時代の地域権力を「公儀権力」と「一揆権力」の二
つに大きく類型化する。これらは戦国時代を通じて併存するものの、
広域的「公儀権力」としての戦国大名こそが、地域社会の期待に応
える公権力であって、織豊政権、幕藩制国家へと展開すると見る
のである。⁽³⁵⁾ だからこそ、「公儀権力」は重要であるということであ
り、さまざまなものが一見乱立する地域権力であっても、「公儀権
力」を軸とすることにより、位置づけが可能になるということであ
ろう。たしかに、「はじめに」で述べたような研究状況で、地域権
力を総括するための道筋が提起された意義は大きい。このことを確
認したうえで、「公儀権力」論が行き着くところの広域的「公儀権
力」について考えてみたい。

まず、広域的「公儀権力」はいかにして成立するか、ということ
である。もちろん、さまざまな要因は語られているのだが、結果と
して「公儀権力」のなから台頭し、あるいは勝ち抜いて広域的

「公儀権力」が成立したとしても、たとえば毛利氏が台頭し、勝ち
抜けたのはどうしてなのか、といった疑問が残される。これはまっ
たくの偶然なのか、否か。

この点、やはり毛利氏を検討対象として、菊池浩幸・村井良介氏
らが毛利氏の「家中」と他の「戦国領主」の「家中」との違いから
毛利氏の優越を論じており、興味深い。北条氏などの場合、史料の
残存状況等からあまり深められていない問題でもあり、いっそうの
進展が望まれる。

次に、成立した広域的「公儀権力」＝戦国大名と、他の「公儀権
力」との関連はどのようなものなのか、ということである。これに
ついては必ずしも明確に述べられていないようでもあるが、池氏の
従前からの所論⁽³⁶⁾と広域的「公儀権力」成立に関わる論調⁽³⁷⁾から推測す
るに、広域的「公儀権力」のもとに包摂されると見ているようであ
る。だとすれば、包摂された「公儀権力」は別のものに変質するの
か、それとも基本的にはいまだ「公儀権力」なのか、という問題が
生じるであろうが、明言されていないところでもあり、ここでは措
く。⁽³⁸⁾ ただし、公儀論との関わりでは、次の点は重大な問題である。
すなわち、広域的「公儀権力」の段階になると、他の「公儀権力」
との関わりも含め、とりたてて「公儀権力」といわなくとも、説明
できてしまう事柄が多いかに見えることである。池氏が取り上げて
いる流通の問題⁽³⁹⁾なども、従来の戦国大名権力論で語られてきたこと
なのではないだろうか。

そこで、以下、公儀論として、北条領国における大名と国人・国衆との関わりを検討し、若干の論点を提示したい。

戦国大名が国人・国衆をも家臣化して二元的な領国支配を行う（少なくともその方向性にある）との見方は、一九七〇年代の戦国大名論盛行の段階から近年に至るまで存在するが、かつて触れたこともあるとおり、国人・国衆が大名の「家中」に取り込まれることなく自らの「家中」を維持し、自らの領を保持していることは、北条氏などの場合、黒田基樹氏の研究により明らかであり、毛利氏でも示されているところである。⁽⁴³⁾

この点、北条氏においても、「御国」「国家」文言の文書上における使用状況から一定程度裏づけることができると考える。すなわち、周知のように、勝保鎮夫氏によって「御国」「国家」は戦国大名が支配の客体として打ち出しながらも、理念的には自らを超える普遍的存在としてすら位置づける概念とされ、稲葉継陽氏や筆者によって（筆者の場合、より留保する点が多いが）基本的に受け継がれているところである。⁽⁴⁵⁾ とくに領国の危機に当たって、これらは軍事動員の根拠などとして活用されたわけであるが、北条氏は国人・国衆に向けて「御国」「国家」を活用しようとした形跡はなく、国人・国衆の側も北条氏の「御国」「国家」を意識して受け入れている形跡がない、ということである。⁽⁴⁶⁾

それでは、国人・国衆は限りなく自立に近い状態にあり、その領は、大名領国の枠外にあるものと考えてよいのであろうか。ここで

問題となるのが、「大途」等と国人・国衆との関わりである。まず、大名側の用例を見よう。

【史料5】

去九日之注進状、今月十四日於小田原披見、仍向其地号八崎地多賀谷取立候哉、從牛久之注進同前ニ候、其地程近敵之寄居、誠苦勞無是非候、雖然以御大途可被押払事轍候条、弥手前堅固之防戦肝要候、猶自是可申候、恐々謹言、
(天正十五年カ)
三月十四日 氏照（花押）

岡見中務太輔殿 参

【史料6】

掟

右、於其方領分、自然陣中へ往還之者、聊成共就致狼藉者、則搦捕、陣中へ可令披露、及菟角者、可致打捨、然万乙令思慮、背法度者就指置者、誠不可然、対大途可為不忠候、此所遂分別、領分毛頭無異儀様可被申付、仍状如件、
(天正六年)
戊寅 (虎朱印)

七月十二日
(秀忠)(8)
富岡殿

石巻左馬允
(康敬奉)

【史料5】は常陸足高城主岡見宗治充ての北条氏照書状、【史料6】は上野小泉城主富岡秀高充ての北条家朱印状である。【史料5】

は岡見氏が多賀谷氏の攻撃を受けて援軍を北条氏に要請し、取次の地位にあった氏照がそれに応えているものである。氏照としては、岡見氏が多賀谷氏に降伏し北条氏から離反しないように、まずは激励をしているわけであるが、そこで「御大途」をもって敵を押し払われるのはたやすいこと、と述べている点に注目したい。「御大途」による援軍は岡見氏を北条側につなぎ止めておくための、いわば「切り札」としての機能を期待され、使用されていると考えるからである。

ついで、【史料6】は富岡の領内において陣中に入出入りする者が狼藉をはたらいた場合の措置で、これを放置するようなことがあっては誠にけしからぬことで、「大途」に対して不忠である、と述べているわけである。国人・国衆である富岡に対して、「大途」への不忠を問題としている点が重要である。「大途」はほとんど富岡の主人に位置づけられているのである。

これらは大名側の言い分に過ぎないのではないかとの見方もある。そこで、国人・国衆側の用例を見よう。

【史料7】

制札

此度之於陣中、夜はしり夜盗、致□のいか程も所用ニ候、おのこゝを立、すくやかなる者、中谷領ハ不及申、いつれの私領の者成共、領主ニきつかいなく陣中へきたり可走廻候、ふちハ当座ニ可出置

候、其上走廻候之者をハ、御大途迄申立、自分之儀ハ一廉可令褒美候、又此儘奉公のそみの者ハ、給分出置可引立候、此以前於当家中、科あるもの成共、又借錢・借米有之者成共、此度之陣へきたり走廻ニ付てハ、相違有間敷候、陣へきたるものハ、河内守方より印形を取可来候、仍如件、

(天正十八年) 寅

二月廿八日

(充所欠)

憲定

(慶寶朱印)

【史料8】

津久井城普請人足積り、

拾人 ミまし

十人 はんはら

十五人 すみた

川入

以上卅五人

右、てんき次第、明日より三日、道具ハくわ・まさかり、四ツいせんにまいるへし、はんハ七ツほうしあかるへし、我々自分之様ニハ無之候、御大とのため城ふしんの儀、致分別可走廻候、若不参者有之ハ、強儀を以、可押立候者也、仍如件、

(天正十八年) 丁

五月廿四日

百姓中

大和守

〔印読カタン〕

(印文未詳朱印)

【史料7】は武蔵松山城主上田憲定制札、【史料8】は相模津久井城主内藤綱秀朱印状写である。これらは、かつても触れたように、秀吉の北条氏攻撃という危機的状況に当たって、【史料7】の上田は「御大途」からの褒美によって陣中への動員を図り、【史料8】の内藤は「我々自分之様」ではなく「御大と」のためであるとして、本拠の普請への動員を図っている。いずれも、自前の正当性・正当化の論理で動員を行わず、「大途」をもち出さざるをえなくなっているのである。⁽⁵¹⁾このほか、諸役免許を認める代わりに「大途之伝馬」を厳密に勤めることを念押ししている事例や、「船渡」について「御大途之印判」がなければ一切停止すると述べている事例など⁽⁵²⁾があり、陸上・水上交通にわたる「大途」の影響・支配がうかがわれる。⁽⁵³⁾

以上の事例から見ると、国人・国衆は「大途」等に規定されるところは大きく、北条氏の公儀に依存・従属している側面は否定できない。これはまた、従来指摘されている軍事的統制―従属関係をも超えているといえるのである。

では、「御国」「国家」に包摂されていない点と、公儀へ依存・従属している点はどうに整合的に考えられるであろうか。さしあたり考えやすいのは、「御国」「国家」に包摂されない現実があるにせよ、公儀への依存・従属は一元的支配の進行過程であるとして、一元的支配への方向性を見出すことであろう。

しかし、事実として国人・国衆の領は、戦国時代が終わるまで存

続し続けるのであり、これをいわば理念的に、大名による一元的支配に行き着くものであると考えるのは、却って不自然なのではないだろうか。つまり、大名領国とは、そもそも大名の「御国」「国家」と国人・国衆の領が複合的に共存するものであるが、大名の公儀により、それはたんなる軍事的統制―従属関係を超える緊密さをもって統合されている、と考えるのである。

また、国人・国衆が「御国」「国家」を用いないのは、彼らが「御国」「国家」に包摂されていないことだけを意味しない。彼ら自身の側にも支配の客体や理念としての「御国」「国家」がないということである。加えて、彼らが公儀（に類する文言も当然含む）を自称することも自身のこととして述べることもほとんどない。それゆえに危機や緊急時などには、外部から正当性の根拠を持ち込まなければならなくなる。ここに大名の公儀が受け入れられる素地があるのである。

ただ、その持ち込まれる正当性が「御国」「国家」ではなく、公儀にとどまるところは重要である。国人・国衆は領ごとまるる大名の「御国」「国家」に取り込まれてしまうのではなく、当主の人格性を色濃く表す公儀に依存しているのである。

以上のような大名領国のあり方は、公儀論からいえば、「御国」「国家」世界と公儀世界の二重構造であるともいえると考ええる。これはまさに「構造」であって、この構造が完全に解消して一元化に至れば、それはもはや戦国大名領国の段階ではないのである。

ただし、それは安定的なものではない。領国の周縁である「境目」には重層的に「境目」の領主が存在し、彼らのうちで上位にあるものは国人・国衆ということになるが、この「境目」の国人・国衆は、敵方から攻撃を受ける危険性が高いため、庇護を受ける大名への従属度は相対的に高くなるが、離反して敵方についてしまう危険性もより高かった。⁽⁵⁴⁾ これもまた、臨戦態勢が臨戦体制とまで化している戦国時代特有のあり方であったのである。

念のため付言すれば、国人・国衆の領がすべて「御国」「国家」世界に包摂されない、というのではない。国人・国衆のイエを大名の一門が相続すれば、多くは「御国」「国家」世界への包摂がなされるであろうし、⁽⁵⁵⁾ 政治的・軍事的事情で領が解体・没収されることもあった。⁽⁵⁶⁾ それでも基本的に国人・国衆の領は戦国の終わりまで存続するのであり、したがって、大名領国は一元的でない、複合的なものとして理解すべきであり、しかも周縁はより不安定なものとしてこの構造を規定し続け、成り立っていたと考えるのである。

戦国時代には、さまざまな異なる性格を持つ地域権力が併存していた。そのなかで、大名領国は大きな力を得ていたが、その構造は一元的ではなく、不安定なものであった。これが、一元的・安定的なものとなるには、次の段階へと踏み出す必要があった。その不安定さが戦争に由来しているからには、「次の段階」とは戦争の終結を伴うものであり、また、戦争の終結は、その惨禍に疲弊していた社会全体が求めるものだったのである。

むすびにかえて—もうひとつの「公儀と地域権力」—

前章で見通した戦争の終結は、多くの可能性を含みつつも、実際には織豊政権から幕藩制国家への「統一」として進んだ。その過程は、政治・軍事の面からいえば、かなりの強力を伴うものであった。ここで、もうひとつの「公儀と地域権力」の問題が持ち上がる。すなわち、中央の「公儀」と広域的な地域権力である戦国大名公儀との問題である。

この点、すでに別の機会にも述べ、⁽⁵⁷⁾ また新稿も発表される予定であるが、筆者自身の作業は漸く緒についたところとの感である。以下では、これらをふまえつつ、若干の論点を述べて見通しとし、むすびにかえたい。

織田信長が足利義昭を奉じて中央の舞台に登場したとき、そこで「公儀」と称されていたのは將軍であった。これは、正当化の問題などは一切抜きにして、將軍であるゆえに「公儀」なのであり、「公儀」といえば、即將軍誰その人格を示すものだったわけである。

こうした状況下、実力的には義昭をしのぐ信長が、いかに政權を握る正当性を得るかが問題になる。これについては、信長が「天下」を將軍である義昭から委任され、その「天下」を前面に打ち出したとする説がある。⁽⁵⁸⁾ つまり、「公儀」たりえない信長は、「天下」支配

の権限を有する將軍から、「天下」を委任されたことにより、はじめて政權へ向けての正当性を得ることができた、というのである。

筆者は、信長により活用された「天下」は、戦国大名公儀の系譜を引く正当化の論理で捉えられると考えるが、当然、この「天下」委任論との関わりにも触れなければなるまい。そもそも、この委任論の根拠は、周知の永禄十三年（一五七〇）正月二十三日付の信長条書で、「天下之儀、何様ニも信長ニ被任置之上者、不寄誰々、不及得上意、分別次第可為成敗之事」とあるところによる。⁽⁶¹⁾これによって、信長が義昭の「上意」にかかわらず「天下之儀」を行えることが表明されている点は、共通認識であろう。ただ、ここで「任せ置かれた」とあるところから、委任の規定性を信長において決定的なものと考えてよいかということである。

委任論に立つ山本博文氏は、「天下」を朝廷や幕府を超越した普遍的な政權概念だと考えれば、信長は「天下人」として新しい王朝の創始者としての栄誉を与えられることになる。しかし「天下」が足利王朝の「公儀」を篡奪するためのレトリックだったとすれば、いまだ信長は足利王朝の委任を受けて畿内から関東にかけて軍事的な勝利を勝ち取った覇者でしかない。王となるためには、より普遍的な手続きが必要であつただろう」と述べ、朝廷官職の必要性に展開している。⁽⁶²⁾山本氏の議論からすれば、「天下」は「普遍的な政權概念」ではなく、「足利王朝の「公儀」を篡奪するためのレトリック」であり、それゆえに「普遍的な手続き」として官職就任が必要

だということであろう。⁽⁶³⁾

だが、永禄十三年正月の時点では、「天下」委任こそが「公儀」「上意」を上回る手だてであつたであろうが、その後信長が着々と政權を固めていくなかで、どこまで「委任」に拘束されることがあつたのだろうか。むしろ、「普遍的な政權概念」であるゆえに、有効に生かしていくことができたのではないか。永禄十三年正月の時点は、信長にとって、旧来の「公儀」との関係において、それを限定し、対等以上の立場につくための、まさに政治的な正念場だったのであり、そのためにはいかなる言辞をも弄したと考えられる。その特定の政治状況を信長政權の全般にわたって適用するのは、いかにも無理がある。「天下」の意味するところ、それをめぐる政治状況も動態的に把握する必要がある。

以上のところから、筆者は、「天下之儀」委任は、永禄十三年正月という特定の政治状況下で、たしかに信長の側から持ち出されてきた論理であつたが、のちには信長の行為を正当化するための「普遍的な」概念として活用されたと考える。ここでは「天下」を委任されたものと見るよりは、信長が自らのものとして活用している点を重視する方が、実態に近いと考えるのである。

この「天下」は、正当化の根拠とされる点にしても、それが信長自身の人格にオーバーラップしてくる点にしても、北条氏における「大途」に類似する。⁽⁶⁴⁾中央の「公儀」は、戦国大名公儀と衝突するのではなく、実質的に取って代わられることにより、政治の表舞台

から姿を消したのだと考える。したがって、秀吉によって持ち出されてくる「公儀」は、かつての中央の「公儀」の再現ではないが、これが戦国大名公儀や信長の「天下」といかに関わるかは、今後の課題である。

ただ、この過程で、戦国大名において二重構造をなしていた「御国」「国家」世界と公儀世界は、「天下人」の公儀世界へと一元化されたうえで、公儀世界の多重構造化へ向かうと想定される。この内実についても今後の課題であるが、地域権力を抱え込みながら成立していた戦国大名の公儀世界が、中央の「公儀」を押しつけて新たな公儀世界を打ち立てていくと見通しておきたい。もうひとつの「公儀」から見れば地域権力であった戦国大名公儀は、中央で新たな展開を遂げ、逆に地域を包摂していくに至ったのである。⁽⁶⁵⁾

注

(1) 戦国大名概念への疑義については、市村高男「戦国期下総国結城氏の存在形態」〔茨城県の思想・文化の歴史的基盤〕、雄山閣出版、一九七八年、所収、のち市村『戦国期東国の都市と権力』、思文閣出版、一九九四年、所収、矢田俊文「戦国期甲斐国の権力構造」〔『日本史研究』二〇一号、一九七九年、のち「戦国期の権力構造」と改題して同『日本中世戦国期権力構造の研究』、塙書房、一九九八年、所収、佐藤博信「戦国期における東国国家論の一視点」〔『歴史学研究』一九七九年度大会別冊、一九七九年、のち佐藤『古河公方足利氏の研究』、校倉書房、一九八九年、所収、今岡典和・川岡勉・矢田俊文「戦国期研究の課題と展望」〔『日本史研究』二七八号、一九八五年〕等を参照。地域社会論については、歴史学研究会日本

中世史部会運営委員会ワーキンググループ「地域社会論」の視座と方法」〔『歴史学研究』六七四号、一九九五年〕、参照。

(2) 近年における研究史整理として、平出真宣「戦国期政治権力論の展開と課題」〔中世後期研究会編『室町・戦国期研究を読みなおす』、思文閣出版、二〇〇七年〕をあげておく。

(3) 池「戦国期の地域権力」〔歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座5 近世の形成』、東京大学出版会、二〇〇四年、所収〕。

(4) 池前注論文および同「戦国期地域権力の「公儀」について」〔『中央史学』二七号、二〇〇四年〕。

(5) 池注(3)・(4)論文。

(6) 久保「戦国大名と公儀」〔校倉書房、二〇〇一年〕。

(7) 久保「書評・黒田基樹著『戦国期東国の大名と国衆』」〔『史学雑誌』一一編一一号、二〇〇二年〕の冒頭で、若干この点に触れている。

(8) 久保①「境目」の領主と「公儀」〔岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』、岩田書院、二〇〇〇年、所収〕、②「支城制と領国支配体制」〔藤本久志・黒田基樹編『定本・北条氏康』、高志書院、二〇〇四年、所収〕、③「境目」の領主・再論」〔『史観』一五九冊、二〇〇八年〕。いずれも従来の地域権力論と十分に切り結ぶには至っていないが、「境目」の領主や、支城制の問題を通じて、戦国大名と地域権力との関わりを考えている。

(9) 池注(4)論文二二頁。

(10) 井上衆罪状書〔『毛利家文書』『大日本古文書毛利家文書』三九八号文書〕。

(11) 福原貞俊以下起請文〔『毛利家文書』『大日本古文書毛利家文書』四〇一号文書〕。

(12) 毛利氏掟〔『毛利家文書』『大日本古文書毛利家文書』四〇四号文書〕。

(13) 同右。

(14) 池注(4)論文二頁。

(15) 朝尾「將軍権力」の創出」〔『歴史評論』二四一・二六六・二九三号、一九七一・七二・七四年、のち朝尾『將軍権力の創出』、岩波書店、一九

九四年、所収)、石母田「解説」(『岩波日本思想大系二 中世政治社会思想 上』、岩波書店、一九七二年、所収)、深谷「公儀と身分制」(佐々木潤之介編『大系日本国家史3 近世』、東京大学出版会、一九七五年、所収)、のち深谷「近世の国家・社会と天皇」、校倉書房、一九九一年、所収)、藤井「一七世紀の日本」の「公儀」国家の形成」(『岩波講座『日本通史』12 近世2、岩波書店、一九九四年、所収、のち改稿の上、藤井「幕藩領主の権力構造」、岩波書店、二〇〇二年、所収)等々、枚挙にいとまない。

- (16) 池注(4) 論文八〇九頁。
- (17) 同右論文七〇八頁。
- (18) 同右論文九一〇頁。
- (19) 同右論文九頁。
- (20) 同右論文一二頁。
- (21) 同右論文一〇頁。
- (22) 同右論文同頁。
- (23) 同右論文同頁。
- (24) 同右論文一四頁。
- (25) 永原「日本中世の社会と国家」(日本放送出版協会、一九八二年、増補改訂版、青木書店、一九九一年)。
- (26) 久保注(6) 書一六頁。
- (27) 池注(4) 論文一四頁。
- (28) 同右論文同頁。
- (29) 久保注(6) 書八〇一一頁。
- (30) 朝尾注(15) 論文、佐々木「幕藩制の成立」(永原慶二他編『戦国時代』、吉川弘文館、一九七八年、所収、のち佐々木「幕藩制国家論」下、東京大学出版会、一九八四年、所収)、深谷注(15) 論文、藤木「大名領国制論」(峰岸純夫編『大系日本国家史2 中世』、東京大学出版会、一九七五年、所収、のち藤木「戦国大名の権力構造」、吉川弘文館、一九八七年、所収)、勝俣「戦国法」(『岩波講座『日本歴史』八中世4、岩波書店、一九七六年、

所収、のち勝俣『戦国法成立史論』、東京大学出版会、一九七九年、所収)。

- (31) 久保注(6) 書一三四頁。
- (32) 池注(3) 論文五〇六、一三頁、等。
- (33) 同右論文。
- (34) 同右論文二八三〇頁。
- (35) 菊池「戦国期「家中」の歴史的性格」(『歴史学研究』七四八号、二〇〇一年、村井「毛利氏の「戦国領主」編成とその「家中」」(『ヒストリア』一九三号、二〇〇五年)。「戦国領主」についての詳細は、村井論文を参照していただきたいが、階層としては國人・国衆や「公儀権力」と重なる。「家中」についても菊池・村井論文を参照のこと。簡要に言えば、戦国時代に再編された領主権力のイエである。
- (36) 池「大名領国制の研究」(校倉書房、一九九五年)に代表される。
- (37) 池注(3) 論文二八三〇頁。
- (38) たとえば、北条氏と関わる国衆について、黒田基樹氏は地域における自立的権力として、「地域の公方」との規定をしている(黒田『戦国大名と外様国衆』、文献出版、一九九七年)。黒田氏の場合、「地域の公方」は北条氏に従属しつつも一定の自立性を保ち続けるわけだが、「公儀権力」が広域的「公儀権力」に包摂されてもお「公儀権力」たりうるならば、「地域的公方」と「公儀権力」の違いが奈辺にあるのか、(名称からしても)いささか理解しにくいことになるのではないか。なお、「地域的公方」概念の問題点については、久保注(7) 書評を参照。
- (39) 池注(3) 論文三〇三三五頁。
- (40) 永原慶二「大名領国制の構造」(『岩波講座『日本歴史』八中世4、岩波書店、一九七六年、所収、のち永原「戦国期の政治経済構造」、岩波書店、一九九七年、所収)、勝俣領夫「一五―一六世紀の日本」(『岩波講座『日本通史』一〇中世4、岩波書店、一九九四年、所収、のち「戦国人名「国家」の成立」と改題して勝俣『戦国時代論』、岩波書店、一九九六年、所収)、等。
- (41) 久保注(8) ②論文。

- (42) 黒田注(38) 書、同『戦国期東国の大名と国衆』(岩田書院、二〇〇一年)、等。なお、黒田氏の「国衆」論への批判として、市村高男「戦国期の地域権力と「国家」・「日本国」」(『日本史研究』五一九号、二〇〇五年)を参照。
- (43) 松浦義則「戦国期毛利氏『家中』の成立」(『史学研究』五十周年記念論叢、福武書店、一九八〇年、所収)、村井注(35) 論文、等。
- (44) 勝保注(30) 論文。
- (45) 稲葉「中世後期における平和の負担」(『歴史学研究』七四二号、二〇〇〇年)、久保「後北条氏における公儀と国家」(久保注(6) 書、所収)。
- (46) この点、久保前注論文、参照。
- (47) 「岡見文書」(『牛久市史料 中世Ⅰ—古文書編—』第四章一九九号文書、一部校訂)。この史料については、久保注(8) ③論文を参照。
- (48) 「阿久津清氏所蔵文書」(『戦国遺文後北条氏編』二〇〇八号文書、以下『戦』二〇〇八のように略す)。なお、この史料には久保注(6) 書でも言及したが、「不忠」に関わる理解に誤りがあったので訂正する。
- (49) 「武州文書所収比企郡要助所蔵文書」(『戦』三三六—)。
- (50) 「相州文書所収愛甲郡彦左衛門所蔵文書」(『戦』二七三—)。
- (51) 久保注(8) ②論文。
- (52) 「鈴木清氏所蔵文書」(『戦』二五七—)。
- (53) 「鈴木幸八氏所蔵長尾文書」(『戦』二七七—)。
- (54) 久保注(8) ③論文。
- (55) 北条氏における氏照・氏邦ら「御一家衆」、毛利氏における吉川元春・小早川隆景ら「毛利両川」を想起されたい。なお、久保注(8) ②論文を参照。
- (56) 本拠を接収された金山由良氏・館林長尾氏や本拠牛久城をなかば接収されて在番衆の常駐を受け入れざるをえなかった岡見氏など。
- (57) 久保「移行期公儀論の前提」(『歴史評論』六四〇号、二〇〇三年)。
- (58) 久保「天下と公儀」(『堀新編』信長公記を読む、吉川弘文館、二〇〇九年刊行予定、所収)。
- (59) 神田千里「織田政権の支配の論理に関する一考察」(『東洋大学文学部紀要』五五集・史学科篇二七号、二〇〇二年)、山本博文「統一政権の登場と江戸幕府の成立」(『歴史学研究会・日本史研究会編』『日本史講座』近世の形成、東京大学出版会、二〇〇四年、所収)。
- (60) 久保注(57) (58) 論文。なお、「天下」の内容に関する諸説については、久保注(58) 論文、参照。
- (61) 「成實堂文庫所蔵文書」(奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』二〇九号文書、吉川弘文館、一九八八年)。
- (62) 山本注(59) 論文七九頁。
- (63) 山本氏の説は、新旧王朝の併存という切り口から、織田・豊臣・徳川の政権を読み解こうという、スケールの大きなもので、ここでは「王朝」「王」等の概念を含め、その全体像には言及しえない。この点、他日を期したい。
- (64) 久保注(58) 論文。
- (65) 市村注(42) 論文では、久保注(6) 書における「御国」「国家」理解に関わっていくつかのご指摘をいただいた。本稿では部分的におこたえしたといえるところもあると考えるが、全体的なおこたえについては、なお他日を期したい。